

# 胡適 「梅蘭芳と中国演劇」<sup>1)</sup>

胡適「梅蘭芳和中国戲劇」(1930年)

その歴史において、中国演劇の成長はある束縛を受けてきた。それは音楽や歌舞および雑技との伝統的な関係から今も脱しておらず、いまだ自然な発話と自由な演技を持つ演劇を形成していない。このことは凡そ否定する術がなく、またその必要もないことである。

しかしその成長において伝統の束縛を受けているという事実は、演劇史の研究者が中国演劇に対してより強い関心を抱くよう促すことだろう。というのも、今日の中国の舞台上に生き活きと具現化されている、演劇の緩慢な進化の過程の中で廃絶されぬまま残されてきたあれらの痕跡は、現在世界のいずこにおいても見ることの出来ないものだからである。そこでは、歴史的な遺物がすべて完全な芸術のスタイルとして保存、貫徹されているのを目にすることが可能である。そして人々は、仮面のような華麗な浄角<sup>2)</sup>の隈取り、舞踊に備わる伝統的規矩にかなったリズム、合戦の場面で披露される雑技、ほとんどの芝居に見られる独白、エリザベス朝および前エリザベス朝時代を思わせるシンボリックな背景が、道具方によって精緻に設えられる様子などをそこに発見するだろう。

言うまでもなく、このような歴史的でプリミティブな風格は、決して芸術的美と相容れないものではない。まさにこうした芸術的美が、プリミティブな習慣を長期に渡って常に存続させ、またそのさらなる成長をくい止めているのである。そして演劇の発展およびその特徴におけるこのプリミティブな様態こそが、観客達により恒常的に想像力を働かせるよう迫り、またこの芸術が更に完璧なものとなるよう促しているのである。

梅蘭芳氏は中国の旧劇の最も徹底した訓練を受けた芸

術家である。彼の数多くの演目から、演劇研究者は自身の眼前に、ここ3、4世紀の中国演劇史が、類い希な芸術的才能によって具現化されているのを見いだすだろう。また最も厳格で、非正統的な価値観を持つ評論家達ですらも、この芸術的才能を已まず賞賛し、また心から感服しているのである。彼の(笛子の伴奏により演じられる)昆曲<sup>3)</sup>の演目は17、18世紀の演劇を、また彼のバイオリンのような胡琴の伴奏により演じられる皮黄<sup>4)</sup>の演目は、ここ1世紀の通俗的な演劇を体現するものである。前者は17世紀の文人が執筆したもので、内容が複雑な上に風格が典雅であるため、すでに多くの大衆の理解できるものではなくなってしまった。ここから更に通俗的な皮黄劇が勃興したのである。しかし梅蘭芳がこうした早期の演目を演じることは重要な意義がある。たとえば『思凡』<sup>5)</sup>という劇は徹頭徹尾一人芝居であるが、その脚本を読んでもれば、まさに中世の僧院におけるある画僧の心理を描いたロバート・ブラウニングの演劇的な詩篇を彷彿とさせる。この時代におけるもう一つの演目『貴妃醉酒』<sup>6)</sup>は、一連の難しくまた精美な舞踊により成り立っている。これら、及びその他の演目から、旧劇の独特な技巧が展開される様を見ることが出来ると同時に、この古い貴族的な演劇が徐々に消滅し、通俗的な皮黄に取って代わられた原因も目にすることが可能だろう。詩と美のみでは一般観客の目を引きつけることは出来ないのである。

皮黄劇は民間に由来するものであり、梅蘭芳氏の友人達は近年、彼を主演とする皮黄劇の演目の創作に力を注いでいる。『群英会』<sup>7)</sup>は民間の舞台に由来するが、『木

1) [訳註] 翻訳に際しては以下を底本とした。翁思再主編『京劇叢談百年録(増訂本)』、中華書局、[1999年]、2011年、77-78頁。

2) [訳註] 顔全体に隈取りを施す男性の役柄。

3) [訳註] ここでは演劇としての昆劇ではなく、京劇の中で昆曲を用いる一部の演目を指す。

4) [訳註] ここでは京劇の別称。広義では各種地方劇が共有する皮黄腔という節回しを指す。

5) [訳註] 京劇。元は昆劇の演目の一つで、『孽海記』の一折。尼の趙色空が仏門の修行に耐えられず、尼寺から逃げ出して下山する様を演じる。梅蘭芳は1910年代中葉から昆曲の演目を集中的に学び舞台にかけたが、この演目は当時頻繁に上演したものの一つである。

6) [訳註] 京劇。梅蘭芳が生涯十八番とした。玄宗皇帝が約束を違えて梅妃のいる西宮に赴いたと知った楊貴妃が、憂さ晴らしに酒を飲んで種々の酔態を見せる様を描く。猥雑な要素の多い芝居であったが、梅蘭芳が何度も改訂を施し低俗な要素を除いた洗練された演目に仕立てていった。

7) [訳註] 京劇。赤壁の戦い前夜、呉の周瑜と蜀の諸葛亮が智謀を競う様を描く京劇の最も代表的な伝統演目の一つで、名優揃い踏みで演じられることが多い。

蘭從軍』<sup>8)</sup>や『千金一笑』<sup>9)</sup>は最近の創作劇である。

これら梅蘭芳氏と懇意な劇作家達はその多くが旧来の文人であり、いずれも西洋演劇の影響を受けてはいない。それゆえ、これら新作劇は一種の宝物庫となり、その中には旧劇の多くの技芸が保存されているが、一方で旧劇の題材そのものは一定の改編をほどこされている。まさにこの意味において、彼の一部の新作は、演劇の発展を研究する人々に関心を持たれているのである。

梅蘭芳氏は勤勉で向学心に富む学徒であり、学ぶことに対する強い願望を一貫して示していた。博学な友人達

の援助のもと、彼はすでに中国演劇図書館および博物館<sup>10)</sup>を設立している。今回遠方に出向くことによりもたらされる必然的制限によって、通常より軽い出で立ちで陣に臨み、また彼の演目に対してある程度の修正を行うことになってしまった。しかしこれらの修正は彼の豊富な芸術的経験に基づいて成し遂げられたものである。彼とその友人達が今回の公演のために準備した図表や解説資料は、世界の演劇史の発展を研究する人士にとって、極めて大きな価値を持つことは疑いないだろう。

(訳：平林宣和)

- 
- 8) [訳註] 京劇。北魏の時、突厥の侵略に対抗するため徴兵が行われ、これに応じた花弧の娘である花木蘭は、老父の身を慮り自ら男装して父に代わって従軍する。偶然に賀廷玉元帥を救った木蘭は、その後大功を立て朝廷から官位と俸禄を賜るが、固辞して父のいる故郷に戻る。男性の演じる女性がさらに男性を演じるという趣向が珍しく、梅蘭芳は1917年5月の初演以降、たびたびこの芝居を演じている。
- 9) [訳註] 京劇。『紅樓夢』第三十一回（撕扇子作千金一笑）に取材した演目で別名『晴雯撕扇』。召使いの晴雯に扇を壊された賈宝玉がこれを責め二人の仲は険悪になるが、後に宝玉が自分の扇を思うままに破かせ晴雯が破顔一笑して事を収めるという物語。梅蘭芳が1910年代以降盛んに創作した古装新戯の一つで、1916年に初演された。
- 10) [訳註] 後の1931年に発足した北平国劇学会併設の図書館と陳列館のことを指すと思われる。